

Ⅲ 出土遺物の報告

1. 瓦 類

昭和58年度の調査では軒瓦368点、鷗尾4点、鬼瓦21点、獅子口3点、熨斗瓦1点のほか多量の丸・平瓦が出土した。これらは飛鳥時代以降、各時代にわたる。ここでは西院伽藍造営に伴う整地土と、瓦窯SY5050・5060とから出土した瓦類及び今回はじめて出土した新型式の軒瓦などについて記述する。なお、軒瓦の内訳は巻末に一覧表を付した。

A 西院伽藍創建整地土出土瓦

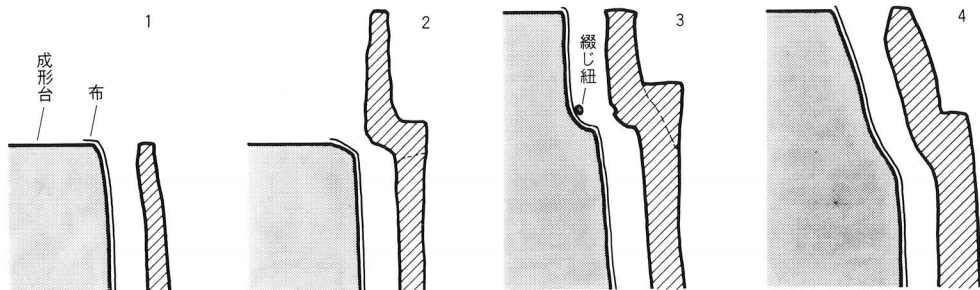
回廊南西隅近くに設定した第271トレンチでは、西院創建時の整地土と考えられる炭混り黄灰色砂質土から軒丸瓦37A、軒平瓦116B・C各1点と、丸・平瓦が少量出土した。

軒瓦37-116は西院伽藍創建時の組み合わせで、標式は37A-116Aである。116Bは量が少ないが、116Cはこれまでの調査で最も多く出土し116Aをしのぐ。116Cは中心飾のなかに遊線があることなどから116A・Bにやや後出すると考えていたが、今回の出土状況や全体的な出土量から西院伽藍の造営期間中に多量に使用されていたことがわかる。

丸瓦は玉縁がつき、凹面の玉縁の付け根に紐圧痕がある。この丸瓦は胎土や大きさなどから軒丸瓦37に伴うと考えられる。ここで丸瓦の変遷について触れておこう(第31図)。

これまでの調査で行基丸瓦(1)は飛鳥時代の軒丸瓦4Cに、玉縁丸瓦の初現(2)は同じく飛鳥時代の軒丸瓦3B・Cに伴うことが明らかである。後者の玉縁は別粘土を本体に接合し凸・凹面をもナデ調査する。布目は玉縁に至らず、行基丸瓦の成形台を用いた可能性が強い。玉縁の付け根に紐圧痕がある例(3)は玉縁と本体を一連でつくり、凸面の肩は別粘土を貼り付けて成形する。丸瓦本体から玉縁への移行はかなり急角度であるため、綴じ紐で布を締める必要があったのであろう。布目が荒く平安時代と考えられる丸瓦(4)は玉縁の凹面に綴じ紐圧痕がなく、本体から玉縁への移行もなだらかなる。類例は法隆寺所蔵の軒丸瓦54Bに認められ、こうした変化は奈良時代に遡ると考える。

平瓦は凹面に模骨痕や布の合せ目を残す桶巻き作りである。凸面は縦あるいは横方向にナデ調整する。斜格子叩き目を施す平瓦(第34図1)があり、これは飛鳥時代に属す。



第31図 丸瓦の変遷

B 瓦窯SY5050・5060出土瓦(第32図)

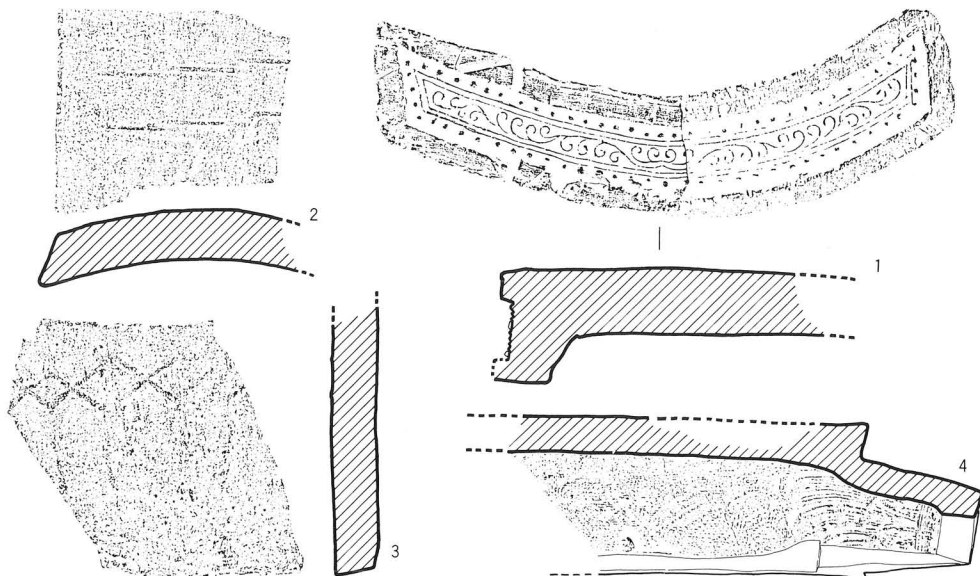
第261トレンチで検出した平窯SY5050・5060の主として焼成室から整理平箱で各々約20箱分の瓦が出土した。ともに埋土の上層には近世の瓦を含むが、それ以下には古代及び中世に属す少量の軒瓦と丸瓦などのほか、焼け損じと思われる多量の平瓦が投棄されていた。ここでは瓦窯の操業に関連する瓦について記す。

軒平瓦143D(1)は蕨手状の中心飾をもつ4回反転の均正唐草文軒平瓦である。軒平瓦143はA～D種があり、D種は内外区の境に二重の界線をめぐらせるのが特徴である。段顎で、平瓦部の凹・凸面とも丁寧な縦ナデを施す。両窯の焼成室から各1点出土。

平瓦(2・3)は143Dと同様にいずれも厚手(2.5～3.0cm)で凹・凸面とも縦ナデを施すが、調整が不十分なために凹面に細かい布目、凸面に荒いX字文と平行叩き目の残るものが少量ある。凹・凸面とも離れ砂が付着している。

丸瓦(4)は凸面に縦ナデを施すが、一部に縦位の細かい縄叩き目が残る。凹面は未調整で布目と糸切痕が残る。玉縁部の凹面端部が突出する点は特異で、布の末端を袋綴じにしていたことが窺える。

軒平瓦143Dの叩き目は不明だが、法隆寺所蔵の軒平瓦143Aには荒いX字文叩きが認められる。この叩き目は今回多量に出土した焼け損じと思われる平瓦の叩き目と同種であり、軒平瓦143Dと平瓦とがほぼ同期の所産であることを示す。また、丸瓦は縄目の細かさや玉縁端部の特徴が法隆寺所蔵の軒丸瓦51Aと一致する。昭和35・36年に実施された法起寺境内における瓦窯の調査では、軒丸瓦51Aと軒平瓦143Bとの組み合わせが明らかにされ、瓦窯の操業が弘長二年(1262)の塔修理に係るものと推測されている。¹⁾SY5050・5060の操業年代もこれに近い時期に比定できるよう。



第32図 SY5050・5056出土瓦(1:4)

C 新型式の軒瓦(第23図)

(1)は外区に珠文をめぐらせた複弁蓮華文軒丸瓦で44Bと同範である。44は部位の異なる2片について仮にA・B種に区分したが、今回出土した資料からみて同種である可能性が強くなった。中房が大きく、蓮子を二重にめぐらせることから白鳳時代に比定できる。

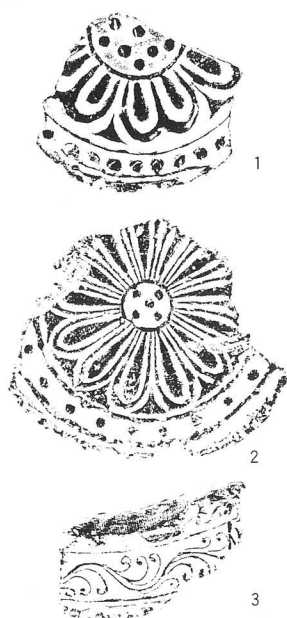
(2)は外区に珠文と線鋸歯文をめぐらせた単弁蓮華文軒丸瓦で、平城宮出土の6135Bと同範である。法隆寺では平城宮と同範のA種が既に出土しているが、B種は初出である。A種は12弁で蓮子1+6、B種は13弁で蓮子1+4。ともに平城宮出土軒瓦編年Ⅱ期(養老5年~天平17年)に比定できる。

(3)は外区を素文とする唐草文軒平瓦で、今回はじめて出土した。文様の酷似するものが平城薬師寺から出土している。それによれば花頭形の中心飾をもつ4回反転の均正唐草文となる。法隆寺例は唐草文の第4単位の途中に脇区界線があり、上外区の界線も脇区に及ぶことから範を切り縮めていると考える。曲線顎で、凸面には縦位の縄叩き目、凹面には布目と糸切痕が残る。時期は平安時代になろう。

D その他の瓦(第34図)

各トレンチから出土した飛鳥時代の平瓦6種と、若干の道具瓦などを紹介しておこう。

これまでの調査によって飛鳥時代の平瓦は桶巻き作りで凸面を丁寧に縦ナデ調整するものが多いが、格子叩き目の残るものや端面を凹凸にした板状工具でカキ目調整しているもののあることが判明している。今回の調査では格子叩き目3種、平行叩き目1種、カキ目調整するもの2種が認められた。



斜格子叩き目平瓦(1)は凸面を縦及び横方向にナデ調整する。凹面は未調整。格子は4×5mm前後(A種)。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ1.6~1.8cm。正格子叩き目平瓦A種(2)は格子が1辺4~6mmとほぼ方形である。凹・凸面とも未調整。硬質で淡褐色を呈する。厚さ1.2~1.4cm。正格子叩き目平瓦B種(3)は格子が3×7mm前後の長方形である。凹面には布目が残る。軟質で黄灰色を呈する。厚さ約2.8cm。平行叩き目平瓦(4)は平行線の間隔が荒く一部に斜めの条線がある。本例では正格子叩き目A種を併用している。凹・凸面とも一部を縦ナデ調整する。硬質で灰色を呈する。厚さ1.3~1.5cm。カキ目調整A種(6)は凹線の幅が5mm前後と広い。凹面は未調整、側面は分割截線が残る。やや軟質で淡褐色を呈する。厚さ2.1~2.4cm。カキ目調整B種(5)は凹線の幅が2~3mmと狭い。側・端面及び凹面の線を篋削りする。硬質で暗青灰

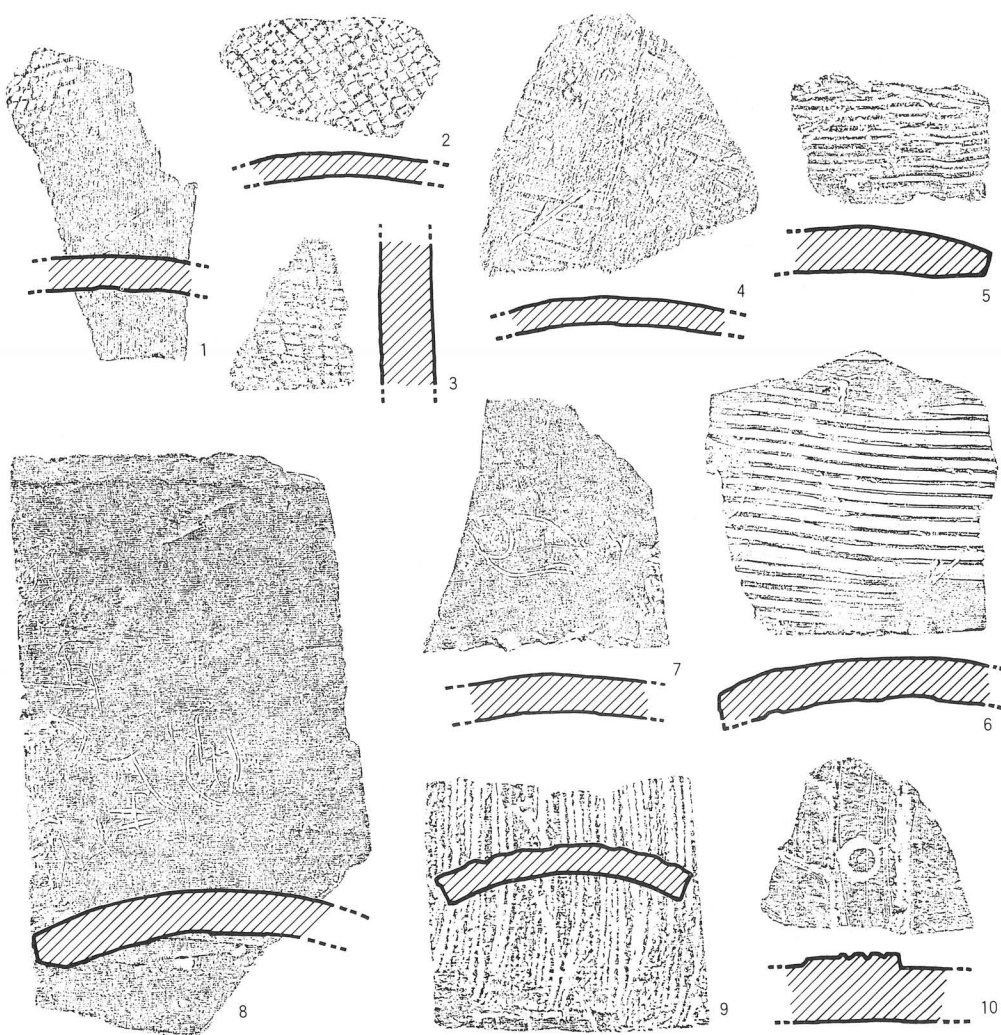
第33図 新型式の軒瓦(1:4) 色を呈する。厚さ約2.4cm。

戯画平瓦（7）は焼成前に魚を描く。凸面は横ナデ、凹面は未調整で布目と模骨痕が残る。硬質で青灰色を呈する。厚さ約2.0cm。白鳳時代に比定できる。（8）は焼成前に文字を書くが解読できない。やや軟質で暗灰褐色を呈するがつくりは（7）と似ており白鳳時代に比定できる。厚さ約2.4cm。

割熨斗瓦（9）は凸帯に荒い縄叩き目、凹面に荒い布目が残る。厚さ約12cm。平安時代。

鷗尾（10）は胴部から縦帯にかけての破片で、凸帯にコンパスによる円文をあらわす。やや軟質で暗灰褐色を呈する。厚さ3.0～3.5cm。他に硬質で青灰色を呈する鰭部の破片がある。表裏に段型を削り出す。厚さ3.3～3.5cm。ともに7世紀中頃に比定できる。

註1）中村春寿・稲垣晋也「法起寺の発掘成果」（『奈良県観光』48 1960），前園実知雄『法起寺境内発掘調査概報』1977



第34図 平瓦・熨斗瓦・鷗尾(1:4)

2. 土器類

昭和58年度の調査では、円明院跡の第265トレンチ、西方院跡の第266トレンチを中心に7世紀前半の飛鳥時代の土器が、また、西室・西院回廊間の第258・259トレンチを中心に奈良時代の土器が出土したが、これらは量的にはいずれもわずかである。出土土器類の主体を占めるのは、過去数年の調査の場合と同じく、遺物包含層及び塵芥処理のための土壌から多量に出土する中世～近世の土器・陶磁器類である。これら中近世の土器類の大半はなお整理途上にあり、今回は比較的遺存状況の良好な西室・西円堂間の第260トレンチと、宝珠院・西室間の第273トレンチの2ヵ所の土壌の出土土器、及び第260トレンチの瓦窯内に投棄された土器類の一部を報告するに留める。

A SK5128出土土器(第35図1・2)

土坑SK5128は第266トレンチ南半部で検出した不整形の土坑。埋土から7世紀前半の土師器杯CIと須恵器杯Hが出土。杯CI(2)は口径16.8cm。口縁部外面と内面上端部をヘラミガキし、放射状暗文をもつ。杯H(1)は径13.2cm, 口径11.0cm, 器高4.5cmで、ほぼ完形。底部外面は底面からみて右回りにロフロによらないヘラケズリで調整する。

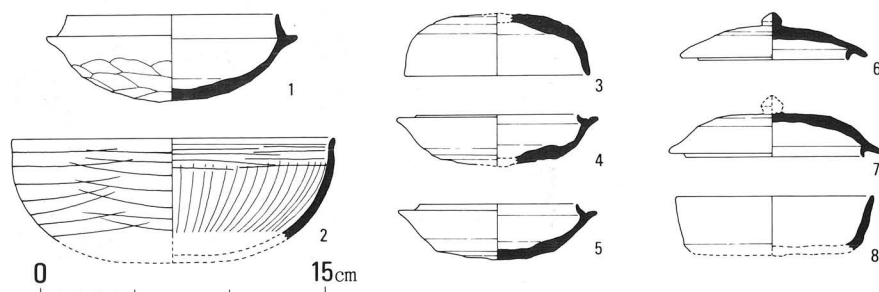
B SK5125出土土器(第35図4)

土坑SK5125は第266トレンチ北端部で検出した不整形の土坑。須恵器杯G蓋と杯Hが出土した。杯H(4)は径10.6cm, 口径8.4cm。底部外面はヘラキリのままで不調整。

C SK5121出土土器(第35図3・7・8)

土坑SK5121は第265トレンチで検出した一辺約60cmの方形の小土坑。掘立柱建物SB5110の柱掘形に重複し、SB5110より古い。埋土から須恵器杯G・杯G蓋・杯H蓋が出土した。杯G(8)は口径10.2cm。底部外面はヘラキリまま。杯G蓋(7)は径10.9cm, 口径9.2cm。頂部外面はヘラケズリで仕上げる。杯H蓋(3)は口径9.6cm。頂部外面はヘラキリままの不調整である。

建物SB5110の規模確認のためトレンチを南に拡張した際に、SB5110の柱掘形を覆う黄灰粘土包含層から小形の須恵器杯G蓋、もしくは直口壺の蓋とみられるもの(6)が出土



第35図 SK5128・5125・5121等出土土器

した。径9.6cm、口径7.8cm。頂部外面をヘラケズリし、宝珠形のつまみをつける。

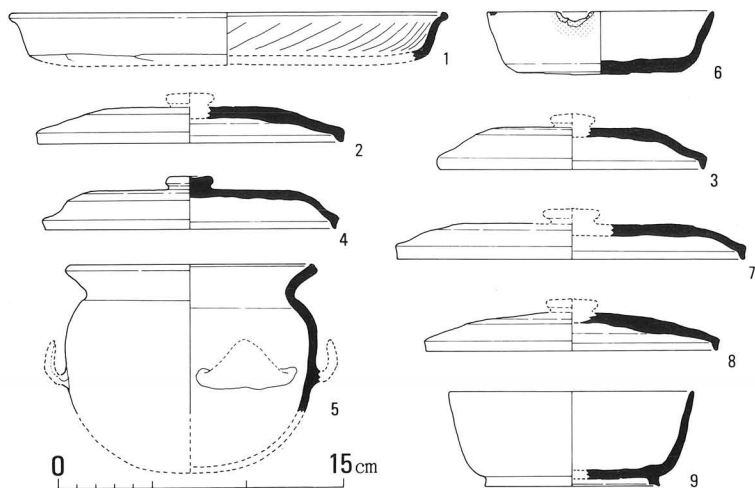
D 第258トレンチ整地層出土土器(第36図6～9・第38図5・6・9)

西室・西院回廊間の北寄り、東西方向に設定した第258トレンチのたち割調査の結果、谷状地形を埋めた数層からなる整地土層を検出した。下層の灰色炭混粘土層から須恵器杯A・杯B・杯B蓋を含む奈良時代前半の土器が、またその下の淡褐色バラス層の上面で、7世紀前半の須恵器杯Hが出土した。杯H(5)は径10.4cm、口径8.3cm、器高2.9cmで、ほぼ完形。底部外面はヘラキリままの不調整。灰色炭混粘土層出土の須恵器杯AⅣ(6)は口径11.8cm、器高3.3cm。底部外面はヘラキリまま。灯火器として使用されており、灯心を固定するため、口縁部の一部を幅1.8cmの半円状に打ち欠いている。杯BⅡ蓋(7)は口径18.2cm。頂部外面はヘラキリ後ロクロナデ。内面は硯として使用され磨耗が著しい。杯BⅢ蓋(8)は口径15.2cm。頂部外面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。杯BⅢ(9)は口径13.0cm、器高5.0cm。底部外面はヘラキリ後ナデで仕上げる。

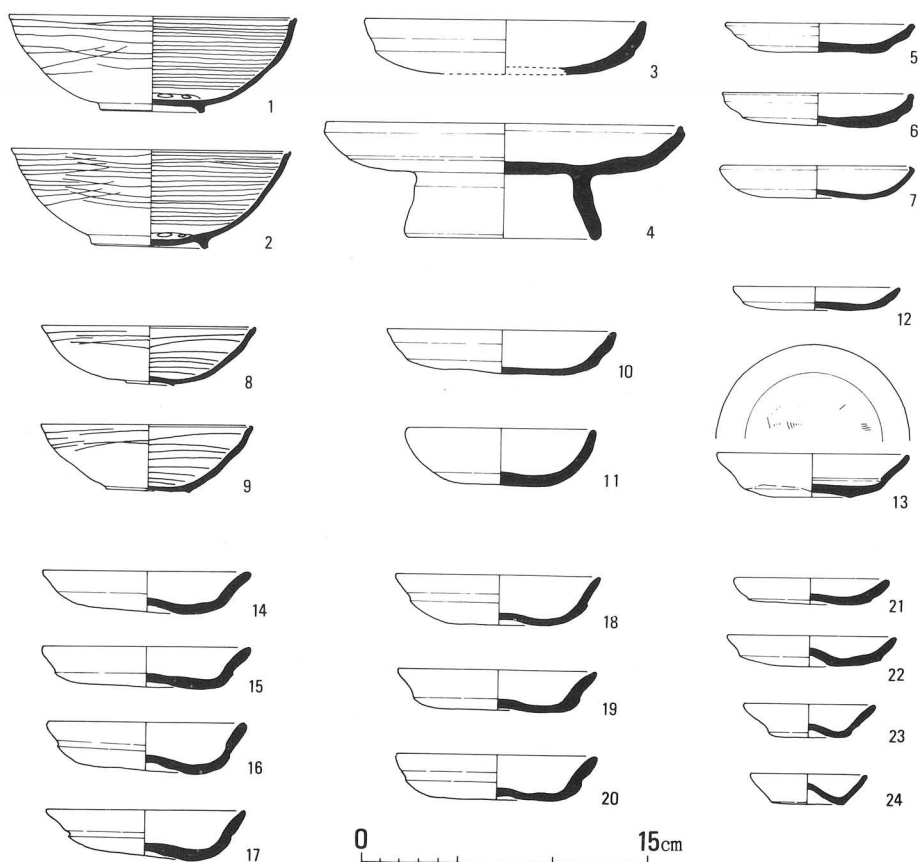
E SD5040出土土器(第36図1～3)

溝SD5040は第259トレンチ中央部で検出した幅約50cmの南北溝。埋土から土師器皿A、須恵器杯B蓋が出土した。皿A(1)は口径22.4cm。底部外面ヘラケズリで、内面に粗い放射状暗文をもつ。杯BⅢ蓋(2)は口径15.8cm。杯Ⅳ蓋(3)は口径13.8cm。頂部外面はいずれもヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。

同じ第259トレンチ西端の黒灰色土遺物包含層から、三彩盤の小破片が出土した(口絵写真)。高台部分と口縁部下端を含む破片で、高台の復原径27.0cm。口径部と高台側面に輪花状の凹みをつくる。おそらく口縁部の平面形を八花形に形どった花盤とも呼ぶべき形態の盤であろう。三彩釉は内外両面に施釉されているが、内面は火を受け、釉が荒れている。胎土の特徴は従来知られている奈良三彩、唐三彩のいずれとも異なる。



第36図 SD5040・SK5066等出土土器



第37図 SK5046・5218・SY5050出土土器

F SK5066出土土器(第36図4・5)

土壙SK5066は第264トレンチ北端でその南端を検出した大形の土壙、奈良時代前半の土師器甕B、須恵器杯B蓋と佐波理匙が出土した。杯B皿蓋(4)は口径15.3cm。器高2.8cm。頂部外面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げ、扁平な宝珠形のつまみをつける。甕B(5)は口径12.8cmの小形品。火熱のためボロボロになっており、器面の調整は不明。

G SK5046出土土器(第37図1～7)

土壙SK5046は第260トレンチ西北部でその東半部を検出した円形の土壙。埋土から少量の瓦器碗・土師器皿が出土した。瓦器碗(1・2)は口径15.0cm, 器高5.1～5.2cm。口縁部内外面をヘラミガキし、底部内面にラセン暗文をもつ。大皿(3)は口径14.6cm, 器高2.9cm。大皿(4)は口径18.8cm, 器高6.1cm。高さ3.5cmの大きな高台をもつ。小皿(5～7)は口径9.8cm, 器高1.6～1.8cm。大皿(3)と小皿(5・6)は口縁部の2段ヨコナデに、また大皿(4)と小皿(7)は口縁端部のつまみ上げに共通する特徴をもつ。

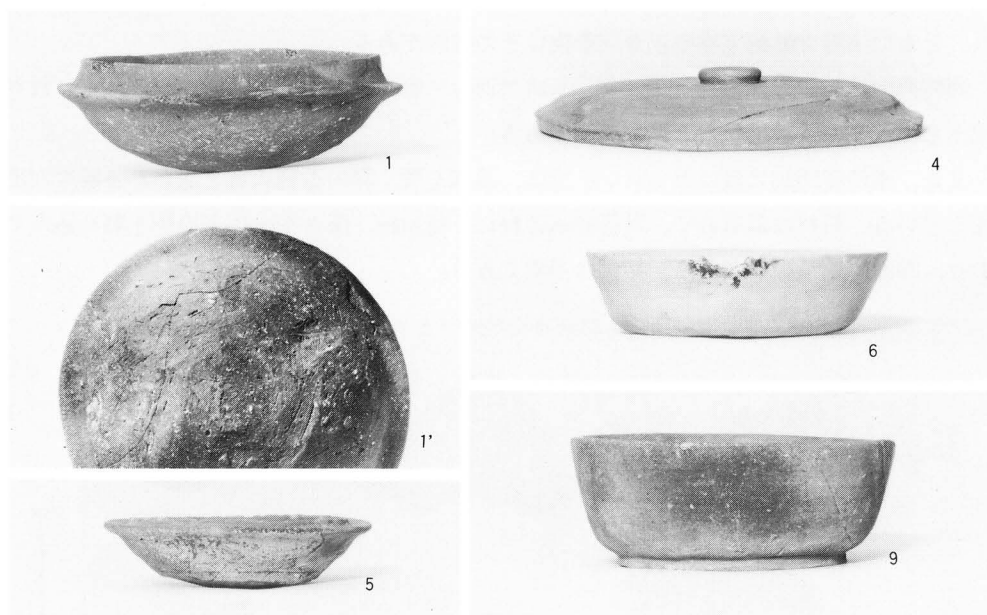
H SK5218出土土器(第37図8～13)

土壙SK5218は第273トレンチ中央部で検出した一辺約2mの方形の土壙。埋土から瓦器碗・土師器皿と青磁小皿が出土した。瓦器碗(8・9)は口径11.1cm, 器高3.5～3.2cm。内

面を粗くラセン状にヘラミガキし、口縁部外面にもわずかに粗いヘラミガキが認められる。大皿(10)は口径11.8cm, 器高2.4cm。口縁部は2段ヨコナデで調整する。小皿(12)は口径8.6cm, 器高1.3cm。他に口径10.0cm, 器高3.1cmのやや深い器形のもの(11)があり、茶褐色系の特徴ある胎土・色調をもつ。生産地の違いを示すものか。青磁小皿は口径10.0cm 器高2.3cm。底部内面に浅い櫛目文をもつ。内面と口縁部外面に青みのかかった灰色の釉をかけ、ヘラケズリ調整の底部外面は露胎とする。

I SY5050出土土器(第37図14~24)

第260トレンチの瓦窯SY5050の廃絶後、その焼成室内に投棄された一群の土器である。総数100個体を越えるとみられる大量の土師器皿からなるが、整理未了のためその一部を報告する。大皿(14~20)は口径10.2~10.8(平均10.5)cm, 器高2.2~2.7(平均2.5)cm。口縁部は1段ヨコナデで、ヨコナデの下端が沈線状に凹むものがある。中皿(21・22)は口径8.0~8.8cm, 器高1.4~1.7cm。小皿(23・24)は口径6.0~6.8cm, 器高1.6~1.7cm。底部中央部が上方へ突出する形態。形態・法量から室町時代以降の土器と推定される。



第38図 SK5128(1), SK5066(4), 第258トレンチ整地層(5・6・9)出土土器(1:3)

3. 金属製品ほか

各所に設けたトレンチで出土した金属製品には次のようなものがあるが、それらには年代の決め手となる土器等とともに一括出土した好資料はない。

青銅製品 毛彫のある表裏渡金の瓔珞・銅環・大小の鈴各1・鏡鈕部・鉏・小円板・銅板・銅線など。

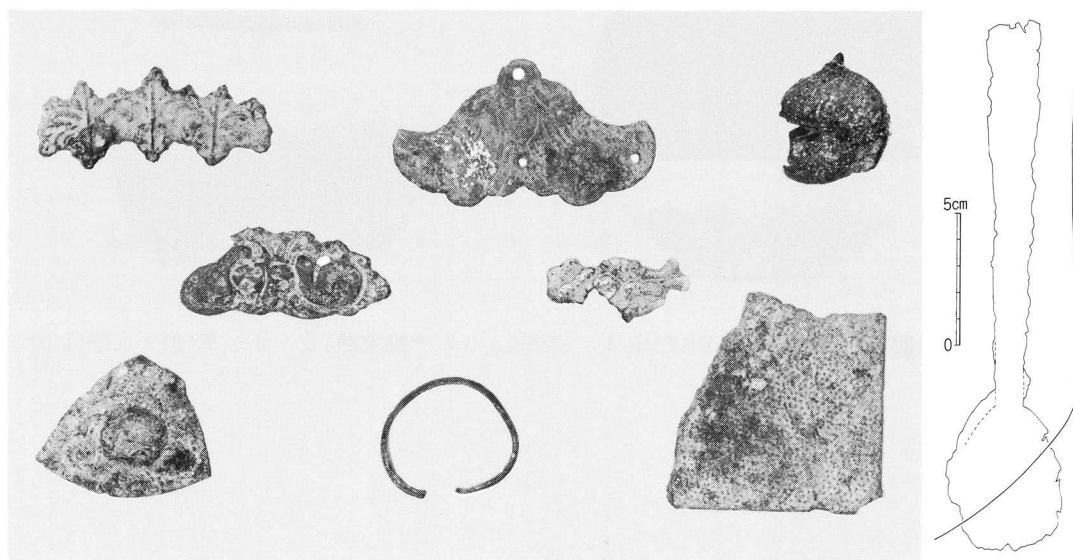
鉄製品 大小角釘・鋸・鏝・刀片・鉄板片。

他に円明院跡に設けた265トレンチのSX5066から、奈良時代の土器とともに佐波理匙が1点出土した。匙は土塊のままようやく取り上げることができ、樹脂である程度固めたのちさらに土を徐々に取り除き、X線透過写真を撮影した。匙はかなりこまかく破損しているため、土部を若干つけたままアクリル透明樹脂で硬化した。

この匙は現全長20cm余あり、匙面は木葉形になっており、柄の幅はきわめて広く、柄尻に近づくにつれその幅を増し約2cmとなる。柄と匙面のなす角度は約135度となり、図の断面形は復原的に描いたものである。このような匙には匙面が円形になるものとの2種があり、ともに法隆寺献納宝物や正倉院御物にその類例がある。

西院西回廊西側の267トレンチでは、ふいご羽口・鉾滓・スサ入り窯壁片がそれぞれ数点出土しているが、遺構年代ともに不明である。

また、本坊唐門脇に設けたトレンチでは、護摩を焚く際の石製火舎と思われる断片が出土している。石材は凝灰岩で、外径42cmの材に、径24cm、深さ9cm以上の炉を削り込んでおり、内面は黒く煤けている。年代は不明である。



第39図 各トレンチ出土青銅製品とSX5066出土佐波理匙